

昭和62年度 工芸技術記録映画 35ミリ・カラー・30分

企画 文化庁 / 製作 日経映像

蒔絵

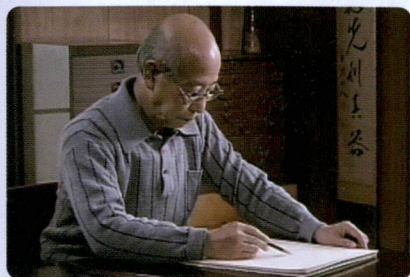
— 寺井直次の卵殻のわざ —



蒔絵は、漆で描いた下絵に金粉や銀粉などを蒔き付けて文様を表すもので、我が国の漆芸の代表的な装飾技法である。蒔絵の技法には研出蒔絵、平蒔絵、高蒔絵など多くの種類があり、貝を用いる螺鈿、金銀の板金を用いる平文、卵の殻を用いる卵殻などが併用され、幅広い表現が行われる。

寺井直次は金沢に生まれ、石川県立工業学校及び東京美術学校で漆芸を学んだ後、理化学研究所で漆工材料の研究に従事した。戦後、漆芸作家として制作活動を展開し、特に、蒔絵及び卵殻を深く研究してこれらの技法を高度に体得し、昭和60(1985)年、重要無形文化財「蒔絵」の保持者に認定された。氏は、卵殻によってぼかし、奥行き、動感、白以外の色調などを表現することに成功し、その効果を活かした作品を数多く発表し、高く評価される。また、金胎素地の研究にも大きな成果を上げている。

この映画は、寺井直次が作品「金胎蒔絵漆箱「飛翔」」を制作する工程を忠実に記録したもので、重要無形文化財の保存、後継者の養成、技術者及び学識者の研究に役立てようとする意図のもと製作されたものである。



重要無形文化財「まきえ蒔絵」てらい なおじ保持者・寺井直次

寺井直次は、蒔絵の中でも卵殻の技法に優れ、この技法を中心に用いて詩情豊かな優れた作品を制作してきた。昭和60(1985)年、重要無形文化財「蒔絵」の保持者に認定された。



石川県立輪島漆芸技術研修所いしかわけんりつわじましつげいぎじゅつけんしゅうしょ

寺井は作家活動を続けながら、後半生、石川県立輪島漆芸技術研修所で後進の育成に尽くし、授業ではデザインの大切さを説いた。



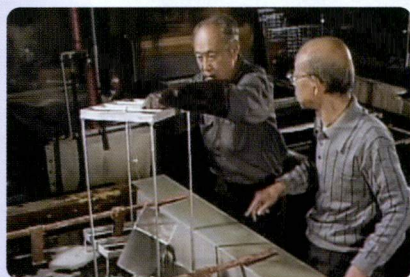
意匠構想・図案

群れをなして飛ぶ鶴を卵殻で表す作品を制作する。気品のある鶴の姿を借り、澄み切った宇宙の広がり凝縮してとらえる。全体の意匠について構想を練り、手箱の原型を油粘土あぶらねんどで作る。



素地作りそじ

軽く堅牢な素地を作るため、アルミニウムを素地の材料に選んだ。アルミニウムの板は、木型きがたの形に合わせて成形され、溶接されて箱の形になる。



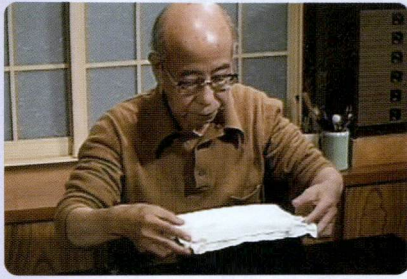
素地の表面加工

アルミニウムをアルマイト加工して表面にミクロン単位の無数の細かい穴うるしを作る。こうすることで漆がその穴に浸透し、金属面にも漆がしみ込んでいくようになる。



下塗したぬり

アルマイト加工した素地に漆で下塗をする。金属面に浸透した漆は、一定の温度と湿度を加えると乾いて堅牢な皮膜を作る。



下地

金属の冷たい感触を和らげるため、薄い牛のなめし^{がわ}草を貼る。さらに麻紐^{あさひも}を巻いて補強^{うるし}し、漆をしみ込ませた後、漆下地^{うるししたじ}を施し、中塗^{なかぬり}を行う。



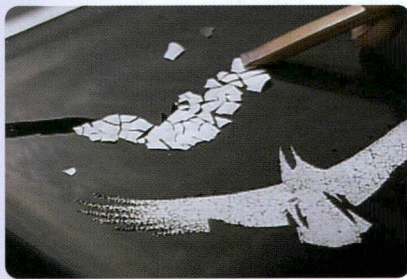
文様の構想・置目

蒔絵^{まきえ}の金や卵殻の白などの配色を考慮しながら文様の構想を練り、文様が決定すると正確な展開図^{おきめ}を作る。文様を漆で和紙に写し取り、手箱に転写する。



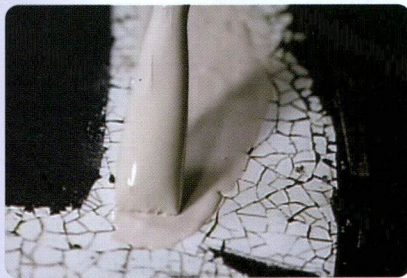
卵殻の準備

鶏^{にわとり}よりも薄い鶉^{うずら}の卵の殻を使う。硝酸^{しょうさん}を加えた水で拭き、斑紋^{はんもん}がとれて白くなったものを選び、殻の内側の薄膜を丁寧に剥がす。卵殻の表と裏を判別しやすくするため裏側に墨を塗しておく。



卵殻置き

呂色漆^{ろいろうるし}を塗り、卵の殻を置く。大きな文様から置き始め、大きな破片を上から押さえて割り、余分な破片は取り除き、隙間が空いた部分には殻を足す。大きさや色艶を選んで殻を並べ、鶴の形と表情を作り上げる。



漆固め

貼り終えた卵殻^{しるうるし}に白漆を塗る。卵殻の割れ目の間にも白漆が浸透してしっかり固着し、白色も強くなる。周囲には黒漆を塗る。



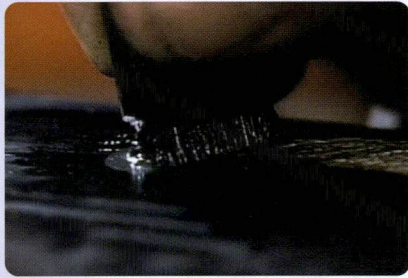
平文

鶴のくちばしや湿原^{あし}の蘆には、薄い金の板金^{いたがね}を文様の形に切って漆で貼る。金銀の板金で文様を表す技法を平文という。



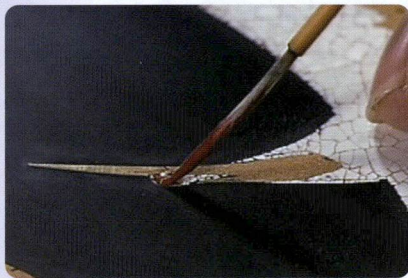
まき え ら でん ④ 蒔絵・螺鈿

湿原の部分に大粒の平たい金粉（平目粉）を一粒ずつ置き、周囲に金粉を蒔く。湿原の水面や空には鮑貝から取った玉虫貝を細長く切って貼る。



ぬり こ とぎ だ ④ 塗込み・研出し

黒呂色漆を塗り、よく乾くのを待って研ぎに入る。駿河炭で荒研ぎした後、炭粉で卵殻を研ぎ出す。



みが ④ 細部の仕上げ・磨き

鶴の首、羽などの細部に蒔絵を加える。鶴の目に平文を置き、脚には金粉を蒔いて針で線彫りし、丹頂鶴の頭部には朱漆を塗る。針炭で文様の細部を研ぎ終わると、磨きの工程に入る。



④ 箱の内部の仕上がり

手箱を用いる人が温かい親しみを味わえるように、三段の内箱の側面に亀甲文をあしらい、内側には桐の柾目材を貼り、金胎の硬さを感じさせない仕上がりとした。



④ 完成作品「金胎蒔絵漆箱「飛翔」」

鶴の舞い立つ広い宇宙を手箱の上に凝縮させた作品「金胎蒔絵漆箱「飛翔」」が完成した。

スタッフ
製作 / 小谷田 亘
照明 / 松橋仁之
音楽 / 広瀬量平
解説 / 伊藤惣一

脚本・演出 / 山添 哲
演出助手 / 佐藤哲夫
効果 / 佐藤日出夫
録音 / 甲藤 勇

撮影 / 高畦幸一
撮影助手 / 大木大介
原版編集 / 井上正司
現像 / IMAGICA